



『関谷興仁作品集 悼III』

強制連行=万人坑

(朝露館発行・1500円+税)

関谷興仁『悼』の世界

高橋武智

本誌の慣例上、「本の紹介」に準ずる扱いにするが、事情はや、複雑だ。画集・写真集というものでもない。主題が陶板作品という一般になじみのない芸術ジャンルだからだ。陶芸家は1932年生まれの関谷興仁さん。教員に甘んじていられた波乱に富む前半生も紹介したいが、残念ながら紙幅がない。

陶芸の町・益子(栃木県)で制作にうちこんでいた関谷から連絡があり、クロード・ランズマン『シヨアー』(ヘブライ語でホロコーストを指す)の拙訳全編を陶板に移しかえたいとの申し出を受けたのだが、できあがりかどうかというものか、何も分かっていなかった。

数年後に完成した作品を益子の工房・展示館(朝露館)にお訪ねして拝見、驚嘆した。筆で描いたすべての文字を焼きつけた無数の陶板群を(途中で気に入らず二度もこわしたという)作者ならではの形に組み合わせ(「インスタレーション」であった。『シヨアー』についての評論や研究は、日本をふくめ世界に無数にあるが、こういう表現形式を与えた例をほくは知らない。

いずれも強いられた死を主題とする作品だが、濟州島蜂起(1948)をうたった金明植の叙事詩や、お連れ合いの石川逸子さんの『ヒロシマ連袴』と並んで、『シヨアー』陶板も、『悼』と題された作品集となって結実した(写真・石黒健治)のが2003年だった。この独自の芸術を語るにはこの人を描いてない針生一郎が、力のこもった「関谷陶板作品私観」を寄稿している。

2008年に刊行された『悼II』は、ペルーの作家、スベトラーナ・アレクシエー

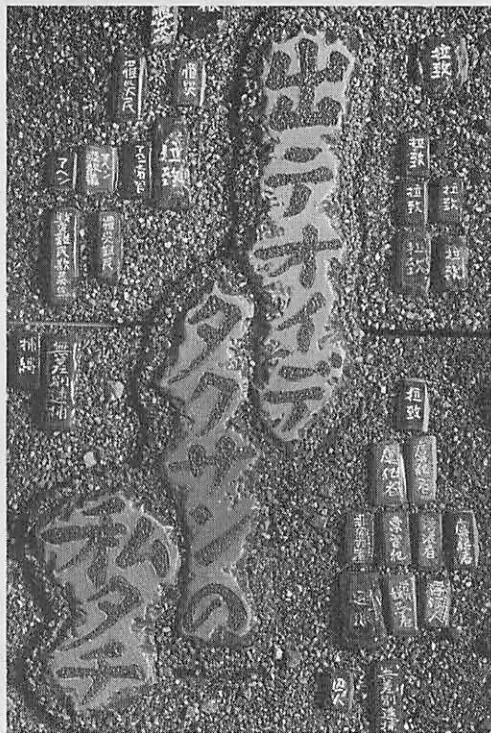


中国人強制連行 万人坑

ビッチがその時点での生存者の証言をまとめた『チエルノブイリの祈り』(1996)と、『シヨアー』の陶板を中心に構成された作品展をまとめたもの。

「……黒い陶板は、それらのかたちや肌合いによって、さらに配置の相違によって、悲哀、憤怒、絶望、鎮魂などといったさまざまな感情が暗示される。「……のは」、それぞれのテーマに対する関谷自身の思考や感情が陶板の制作過程に投影されているからである」と大築勇喜嗣は透徹した作品分析を載せている。

それから5年半の今春、『悼III』の刊行に



コーストにしほられていた。材質の重さもあり（「シヨアー」陶板の一部は東日本大震災によって割れた）、朝露館以外での展示の例は少ない。労をいとわぬ読者は益子まで足を伸ばして現物に接していただ

きたいものだ。

（朝露館訪問と「悼」についての問い合わせ先…TEL124100022

東京都葛飾区奥戸6-18-17 関谷

TEL031369414369

「悼」3500円 「悼II」5000円

（たかはし・たけとも／本誌編集

委員）

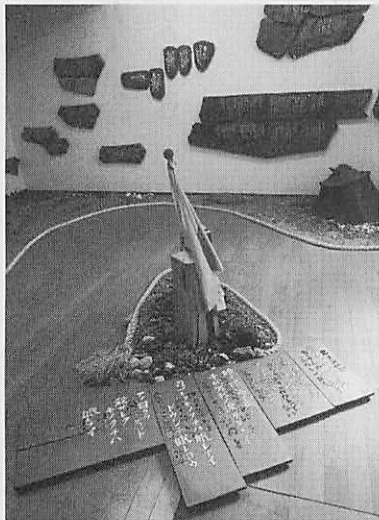
接した。この期間関谷は新たなテーマとして、中国人の強制連行にとりくんでいたようだ。作者の動機は、タイトルの下に付された次のエピソードに遺憾なく示されている。「私たちの文化を育んでくれた中国／その中国を／昭和の初期／私たち日本人がしたことは」

展示の前半は「中国（本土における）強制連行・万人坑」、後半は「日本本土への連行」に当てられている。

本土には強制労働のための事業所が135あり、本誌でも何度かとりあげた花岡もその一つだ。

花岡の例が示すとおり、単なる「労働」でなく、殺害・虐殺の連続であった。

関谷の視点は日本による、われわれ自身による中国人のホロ



旧在日強制連行殉難者追悼の黒い布沓（2010.8 南京大虐殺記念館広場 抗日勝利65周年南京和平集会）